



配管施工部 取締役 専務

千葉 真也

(前編に続く)

16歳のときに、配管工としての道を歩み始めた千葉真也。20代の頃に出会った仲間たちとともに、2012年4月にさくら株式会社を設立した。以来、数々の難しい現場をこなし、さくらの発展に貢献。配管工事のスペシャリストである千葉に、若手への思いやこれからの夢を聞いた。

後輩の成長が、自身のモチベーション

「仕事は見て覚えろ」。

職人の間ではさして珍しくもないセリフである。千葉が新人の頃もよく言われたものだが、自身はその言葉をあまり好まない。見ることで仕事はある程度

は覚えられる。それでもやはり、きちんとした指導をした方が、より正確な仕事ができるようになるのだと考えている。これまでも、若手からの質問には丁寧に答え、積極的に作業の方法を教えてきたつもりだ。千葉はそういった交流の時間が好きであり、後輩が仕事を覚え、実力をつけていく様子を目の当たりにするのは、仕事への活力にもつながった。

ここ数年で、後輩たちも目覚ましい成長を遂げ、千葉が現場に赴く機会もだんだんと減っている。今では、小規模な工事ならば安心して任せられるようになった。

い愛情を抱く千葉のこれからの活躍と、さくらのさらなる発展を、心から祈りたい。

50歳までに叶えたい夢

40歳を迎えた千葉には、新たな夢がある。配管工の技術をさらに学ぶために、海外進出をするという夢だ。

「日本国内で確立された技術とは別の仕組みがあるものなのか」。

「配管工事の道具や材料は、どのようなものを使用しているのか」。

疑問がどんどん湧いてきて、興味が尽きることはない。特に訪れてみたいのは、アメリカだ。配管工のあらゆる技術を学び、スキルを盗めるものなら盗みたい。それを国内に持ち帰り、実践できれば、さくらの成長にもつながるはずだ。いつの日か海外へ渡る日に備え、今できるこ

さくらへの思い

とは、配管工としての実績をさらに積むことだと考えている。

取締役専務として、さくらを支える社員たちには様々な思いを抱いている。まずは、「体を大事にしてほしい」ということ。職人の仕事は体が資本。健康管理には十分に気を付け、楽しく仕事に取り組んでほしい。

また、最近は新入社員も増えてきた。職長を担う者たちが、しっかりと後輩を指導してくれることに期待している。

「新人時代に一番大事なのは、一步一步の積み重ね。初めはゆっくりでいいので、焦らず、急がず、自分のペースで歩んでいくことが成長につながるのです」。



▲左：三浦工業の蓮太さん。なんとご息女と同年！

企業情報

設立年：2012年4月
年商：608,257,000円
※2020年3月決算時点



千葉 専務ってこんな人!

今回は、千葉専務と親交の深いお二人に「千葉専務ってどんな人?」かを、詳しく伺いました。お二人の言葉の端々から、頼れる兄貴肌な千葉専務のお人柄が浮かび上がってきます……!



社長
たかはし かずよし
高橋 和義さんより

千葉専務との関係性

さくらの創業前からの付き合いで、かれこれ15年以上が経ちます。当時、東日本大震災後、私と真也さんで話し合い一緒にさくらを立ち上げました。真也さんの方が5歳年上ですが、私にとって真也さんは仕事のこともプライベートのことも何でも話せる存在です。

メッセージ

仕事のこともプライベートのことも含めて、真也さんに喋っていないことはありません(笑)いつもありがとう。これからも死ぬまでよろしくお願いします!

千葉専務を一言で表すと……

「とにかく仕事に真面目」

「もっと丁寧に」「もっと綺麗に」と質の高い完成度を求める真也さんは、お客様からも絶対の信頼を置かれています。安全面も考慮して、仕上がりも丁寧で、工期も必ず守ってくれています。部下に厳しい面も多々ありますが、思いやりあつての厳しさなのです。さくらの中では、真也さんの右に出る者はいないほど、頼れる親方です。

思い出エピソード

13年ほど前、まださくらが立ち上がっていないときの話です。当時担当していた現場で、私が他社の職人と喧嘩をしまい親受け会社の社長から激怒されたことがあります。そのとき真也さんは大阪出張中だったにもかかわらず仙台まで戻り、必死に庇ってくれ私のことで頭を下げてくれました。そのときに、『この人はマジで頼りになる』と思ったことを覚えています。

千葉専務との関係性

私の上司です。初めて出会ったのは6~7年前、まだ私がさくらの協働会社で働いていたときでした。約3年前にさくらに中途入社してからは、中々現場を共にする機会がありませんでしたが、2021年3月から5月にかけて気仙沼の現場で一緒にさせていただきました。

千葉専務を一言で表すと……

「漢」

厳しさの中にも優しさがあつて、いつも面倒を見てくれたり助けてくれたりと、頼りがいのある上司です。部下ととことん向き合い、今後のためを思って叱ってくださることに日々感謝しています。

思い出のエピソード

相馬LNGという現場での話です。私は地元が相馬だったこともあり、その現場を担当しているときはお弁当を持参していました。しかし、その日は夏場の猛暑に見舞われており、お昼にお弁当を開けると既に悪い状態に……。すると、その様子を見かけた真也さんが「俺腹減ってないから、お前が食べよ」と、ご自身の昼食のおにぎりとお弁当を渡してくれたのです。そのときから、真也さんの人柄に惚れて、「この人のためなら何だってする」と決めました!(笑)

メッセージ

いつもありがとうございます。真也さんに怒られない男になります!



やまき まこと
八巻 誠さんより

歴史の偉人名言

北条早雲

名言には、モチベーションや背中を後押ししてくれる効果があります。数百年前の言葉が現代にも残っていることから、そのエッセンスは現代社会にも応用できることがわかるのではないのでしょうか。今回は、北条早雲の名言をご紹介します。

少しでも暇があれば、物の本を見、文字のある物を懐に入れて、常に人目を忍んで見るようにせよ。

意味

優れた書物を読むことは、己の教養を高める効果がある。常に書物を持ち運び、少しでも時間があれば人の目に触れないように読みなさい。



努力を怠らなければ目標は実現できる。人目につかない陰の努力が功を奏す。

早雲は晩年、家臣の心がけを『早雲寺殿廿一箇条』としてまとめて記しました。

その中でも、読書の必要性を説いた背景には、己の教養を高めると共に文字を忘れないようにするという目的があります。

使い慣れた言葉でも、使わないでいると忘れてしまいますが、**頭を鍛えることを怠らなかつた早雲は、**

88歳まで現役を続けたといえます。

早雲の賢さは、こうした読書による頭の鍛錬の賜物といっても過言ではないでしょう。

また、**読書のみに限らず「目標のために継続的な努力をする」という観点においても、自分を磨き続けることの大切さが学べる名言**と言えるでしょう。



北条早雲とは

後北条氏の祖で、戦国大名の先駆けとも言われた北条早雲。早雲は大器晩成であり、人生50年と言われていた時代に57歳で一城の主になりました。浪人の身分から力で成り上がった背景とは対象に、内政に優れており、減税政策などの策を行い、小田原北条家の基礎を作った人物です。